

原著論文

スペイン風邪流行と熊本における状況について

熊本県立図書館（くまもと文学・歴史館）

丸山 伸治

【キーワード】 スペイン風邪、流行性感冒、悪性感冒、感染状況、九州日日新聞

要旨

およそ百年前に世界中で蔓延した感染症であるスペイン風邪。これまで熊本における感染流行の状況はあまり言及されてこなかったが、内務省衛生局の報告書によれば県内の死者は約七千人にのぼる大きな災厄であったことが確認される。本稿では新型コロナウイルスの感染防止策の参考ともされているスペイン風邪について、新聞記事や関係資料等をもとに当時の状況を明らかにしたい。

はじめに

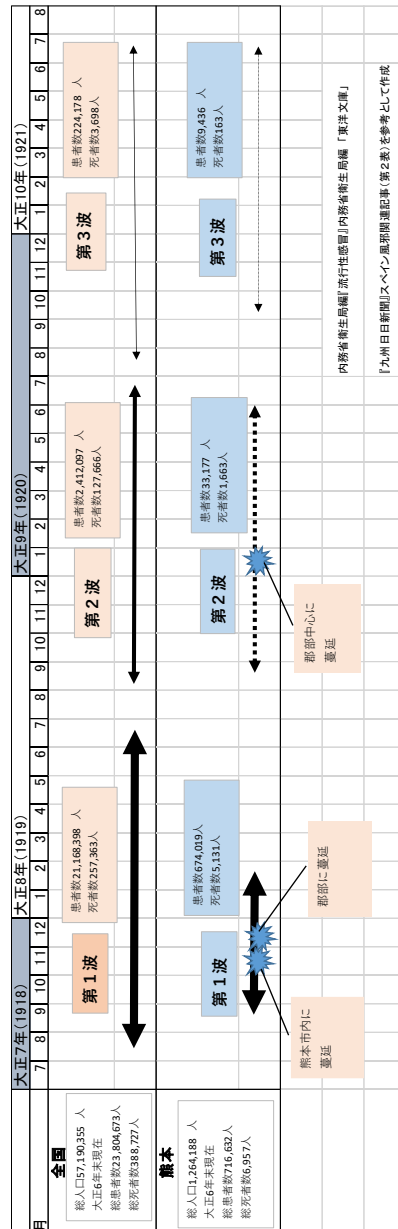
令和二（二〇二〇）年の我が国の主要なニュースは、中国における新型コロナウイルス感染症の発生に関する報道から始まった。当初は、対岸の火事といった雰囲気であったが、武漢での詳細が届き、さらには横浜港に入港したクルーズ船の乗客が罹患し、日々患者数の増加が報告されるにつれ、人々の危機感が高まっていた。都市を中心として感染がひろがりつつあった二月二十八日には政府により全国の学校の一斉休校の要請が行われ、四月七日には新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言が東京・大阪など七都道府県に発出、次いで四月一六日には全国に対象地が拡大され、店

舗の営業やイベントの開催自粛、人々の不要不急の外出や移動の制限など、まさに異例づくめの措置がとられた。

さて、こうした報道の中で目に留まったのが安倍総理（当時）の三月三日の参院予算委員会での答弁^①である。学校の一斉休校の要請を行った根拠の一つとして、大正期に世界中に蔓延した「スペイン風邪」における米国の対応を参考にしたと述べ、大正時代の事例を現代の感染症対策に生かしていることを明らかにした。それでは、今からちょうど百年前の日本、そして熊本が体験したスペイン風邪のパンデミックとはどんなものだったのか。関係資料をたどると、そこには確かに現代の我々に示唆を与えてくれる事実も少なからず含まれている。従来、熊本県内の市町村史などでもスペイン風邪に関する記載は少なく、わずかに、一部の市史や医師会史などに断片的な記述があるに過ぎなかった^②。本稿では、我が国のスペイン風邪の状況を概観するとともに、従来あまり注目されてこなかった熊本における蔓延状況と社会的な影響などを、内務省の記録や当時の新聞記事などを中心とする資料をもとに、いささかなりとも明らかにしてみたい。

第1表 スペイン風邪の罹患患者数・死亡者数（全国・熊本）													
※第3波の全国の患者総数は内訳と合計が一致せず													
○全体集計													
全国													
患者総数	21,168,398	2,412,097	224,178	23,804,673									
死者総数	257,363	127,666	3,698	388,727									
患者百対死者	1.22	5.29	1.65	1.63									
患者総数	674,019	33,177	9,436	716,632									
死者総数	5,131	1,663	163	6,957									
患者百対死者	0.76	5.01	1.73	0.97									
※人口総数は大正7年基準													
○第1波（大正7年8月～8年7月）													
全国													
患者数	19,232,675	496,023	516,000	384,249	227,228	152,976	70,684	41,607	22,724	14,327	5,672	2,591	1,044
死者数	204,730	8,302	10,100	11,927	7,915	6,098	3,515	2,058	684	277	123	45	24
患者数	672,580	534	905	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
死者数	5,098	15	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
○第2波（大正8年9月～9年7月）													
全国													
患者数	179,565	1,332,713	581,816	159,370	79,768	72,434	5,150	1,281	2,412,087				
死者数	5,102	55,096	38,485	17,302	8,555	2,742	346	38	127,666				
患者数	3,355	17,522	8,995	1,943	405	863	86	8	33,177				
死者数	118	676	703	119	27	12	8	0	1,663				
○第3波（大正9年8月～10年7月）													
全国													
患者数	282	659	1,616	3,738	14,256	28,853	44,296	77,537	37,550	11,669	2,859	881	224,178
死者数	16	24	76	134	279	451	711	1,030	709	210	46	12	3,698
患者数	0	0	10	439	1,111	1,864	3,450	2,091	202	187	44	38	9,436
死者数	0	0	0	16	21	30	34	51	7	3	0	1	163
※第3波の全国の患者総数は内訳と合計が一致せず													
○全体集計													
全国													
患者総数	21,168,398	2,412,097	224,178	23,804,673									
死者総数	257,363	127,666	3,698	388,727									
患者百対死者	1.22	5.29	1.65	1.63									
患者総数	674,019	33,177	9,436	716,632									
死者総数	5,131	1,663	163	6,957									
患者百対死者	0.76	5.01	1.73	0.97									
※人口総数は大正7年基準													

第1表 ス페인風邪の罹患者数・死亡者数（全国・熊本）



第1図 スペイン風邪の蔓延の推移(全国・熊本)

第一章 我が国におけるスペイン風邪の感染蔓延の推移

第一節 スペイン風邪の蔓延状況

スペイン風邪はインフルエンザの一種とされ、当時は「悪性感冒」と呼ばれていた。罹患者や死者数については諸説あるが、内務省衛生局が取りまとめた公式な報告書『流行性感冒』^③（以下「報告書」と記載）によると、国内で約二三八〇万人の患者と約三八万人の死者、そして驚くべきことに、熊本県内でも約七二万人の患者と約七千人の死者が報告されている。大正六年末の日本の総人口が五七〇〇万人余であったことを考えれば、少なくとも国民の約四割が罹患し、また、三波に及ぶ蔓延の終息に足掛け三年を要する、まさに一大災厄というべき事態であった。

報告書の記すところによれば^④、二二〇〇万人余の患者と二五万七千人余の死者を数えた第一波の流行の始まりは、西欧の流行に三、四カ月遅れる大正七（一九一八）年の八月下旬から九月月上旬であった。それに先立ち、南洋から横須賀に帰港した軍艦や、北米から横浜に入港した船舶に集団感染が認められた。感染の端緒となったのが神奈川、静岡、福井、茨城、福島などで、熊本を含む九州には九月下旬から一〇月上旬にかけて広がりが見られた。一〇月上旬には感染が加速し全国に蔓延、十一月にピークを迎える。一二月にやや下火になるも、翌八年に入り再び流行、その後、三月、四月、五月と半減していき、七月頃にはひとまず終息を迎える。

しかし、気候が涼しくなる一〇月下旬頃から再び第二波の流行をみる。神奈川、三重、岐阜、愛媛、佐賀、熊本で流行が再燃し、周辺の諸県に広がっていった。翌年一月にピークとなり三月から半減、七月になり終息。第一波と比べて十分の一程度の患者数であったが、「前回激しき流行を見ざりし地方本回は激しき流行を来し」、さらに、「其感染者の多数は前流行に罹患を免れたるものにして病性比較的重症」な者が多いと記している。第三波は大正九年八月上旬、福岡、高知を手始めに広がった。「普通の感冒と区別する能

はざる程度」のもので、最終的に終息したのが翌十年の七月であった。

内務省の報告書の統計^⑤をもとに、この間の全国と熊本県の患者数並びに死者数を一覧にしたのが第1表であり、蔓延の推移を模式的に図示したのが第1図である。熊本県での第一波は、大正七年九月中旬から発生が見られ、一月から二月にかけてピークを迎え、翌八年二月中旬に終息。第二波は同年九月中旬から発生、翌九年一月にピークとなり、七月に終息した。第三波は同年一〇月に発生、翌一〇年二月に患者数のピークを迎え、同年七月に終息した。統計資料によれば、熊本における感染の蔓延の傾向は、全国の場合と概ね共通している。蔓延の規模も第一波の規模が突出しており、全体を通しての患者数の九割、死者数の七割超をそれぞれ数えている。また、罹患者の死亡率は第二波が高く、第一波に比して六倍ほどに増加しており、ここでも全国の場合と同様の傾向を読み取ることができる。ただし、人口比の罹患率は全国で約四割だったのに対し、熊本は六割に近いなど、より厳しい蔓延状況を示していた。

第二節 蔓延の特徴と当局による感染防止策

この間の感染の特徴として報告書には以下のように記す^⑥。「多くは交通頻繁なる都市に発し之より放射状に其の周囲村落を侵襲するを常とせり」。つまり、感染の蔓延は都市部に始まり周辺の郡部に浸透していった。地方都市では、最初に学校の児童や工場の職工の欠席が見られるようになったかと思えば、「二兩日にして数十数百に上り」、数日中には「全市民の大半を覆うを例とせり」といったありさま。こうした事例を見れば、学校の休校や工場の操業停止の措置は感染防止の定石として納得できる。また、交通の発達した都市部では感染の波が去りつつあるのに、山間の僻地などでは流行が長引くような傾向も見られた。さらに、感染者に対する死亡者の割合も初期は虚弱者や老幼者を除いて少なかったが、「流行の経過と共に病性悪変し肺炎を

併発する者多く、之がために虚弱者のみならず強壯者にて斃れたる者尠ならざりし」と記している。

もとより悪性感冒の蔓延に対し、当局も手をこまねいているだけではなかった。欧米各国の流行状況の把握や予防・治療方法の調査のため担当官を海外に派遣、また、複数の専門家を委嘱し「学説文献の調査考究」、「海外視察員の報告と学者実地家の意見」などを参考とし、第三波の流行を迎えていた大正一〇年一月六日付で「流行性感冒予防要項」⁷⁾を内務省訓令として策定しその実施を促した。内容は三部からなり、(1)病原及伝染経路(推定される病原体と、口腔や鼻孔を通した咳嚏等の飛沫伝染であることを示す)(2)予防方法 ①伝染経路の遮断(飛沫伝染の防止)ハンケチ、手拭等で口鼻を覆ういわゆる「咳エチケット」の推奨。三四尺の間隔を保つての対談。マスクの着用の励行。(患者の隔離)一般家庭や職場、旅館、病院等での心得(集会・集合の制限) 学校等閉鎖や祭礼、冠婚葬祭、各種営業等の自粛(消毒・うがい) ②予防注射の実施 (3)医療及看護等 臨時の医療体制の確立及び予防治療に必要な物資の製造能力の増進、買い占め、売り惜しみ等の取締りなど。現在、政府による対策も、大正時代のそれと基本的に大差ないことが理解できるだろう。

なお、この種の感染症対策の切り札である予防接種も実施された記録が残る。しかし内務省の報告書も総括する⁸⁾とおり、その効果をほとんど発揮しなかった。そもそもこの時期に製造されていたワクチンは、インフルエンザと呼ばれる細菌をもとにしたもので、そもそも細菌とは構造も異なりはるかに微小な存在であるウィルスの研究が途上であった当時の知見⁹⁾では明確な効能を期待するべくもなかった。なお、現在の対策と異なる点は、当局が手洗いを推奨していない点である¹⁰⁾。マスクの着用により飛沫伝染は一定程度防げて、手指を介した接触感染を避ける対策が無かったのは当時の公衆衛生上の知見の限界と言えるだろう。

第二章 熊本における感染状況と影響

第一節 熊本における感染の蔓延

○第一波の状況

それでは、スペイン風邪の流行時における熊本及び周辺はどのような状態だったのか。当時の熊本で発行されていた『九州日日新聞』の紙面をもとにたどってみたい。なお、本稿末に流行期間中の同紙の関連記事を検索した一覧(第2表)を掲載している。

内務省の報告書では九月中旬から患者が発生していたとするが、第一波に関する周辺の感染の記事が確認できるのは、大正七年一〇月二四日付からで、鹿児島県師範学校附属小学校で一八〇名の感染者に伴う休校の措置が報じられる。翌二五日付けでは大分の小学校のほか、大牟田市で「勢ひ漸く猖獗ならんとしつつある」とし、小学校での厳しい感染状況を伝えている。なお、大牟田地方は炭鉱労働者が多く、労働者が密集する環境から、かなり蔓延の見られた地域である。熊本県内については、二六日付けで「熊本付近にも患者夥し」の見出しで、「古町地方に患者最も多く又中学済々黷にては昨二十五日の如き一学級に十七名の欠席者あり其他市内の小学児童中にも漸く蔓延せんとするの兆あり」と報じた。二七日付けでは「流行感冒益猖獗 全県下の学校襲わる 済々黷は昨日までに患者二百五十余名 屏息するまで臨時休校」の見出しのもと、下益城、玉名、鹿本、天草などの学校の患者数を伝える。済々黷は一〇月十六日から十九日まで鹿児島に修学旅行に赴いていた。「十九日帰熊してからボツ／＼患者が殖えたという云ふから如何にしても鹿児島から傳染されたものらしい」との感染経路を推定する校医のコメントを載せている。

感染は、地域に深く浸透していった。一〇月二九日付の紙面では済々黷や熊本中学などの状況のほか、「市内小学校休校多し 八代方面猖獗」、「郵便局も欠勤者多数 配達は平素とおり行はれず」、「熊本専売局では二百人」な

える。翌二五日付けでは、県内各地の患者数・死亡者の統計を伝える。その後、二六日付けで宇土郡大嶽村・戸馳村の状況、三〇日付けで球磨地方の状況を報せる記事、二月二日付けで県下の患者数と死者数を掲載、同五日付けで「熊本県下の流行衰ふ 休校も減る」と題した記事の後、感染流行を伝える記事は見られなくなる。

なお、第二波の特徴として都市部よりも郡部での蔓延の度合いが高く、そのことは全国的な傾向とも合致している。恐らくは、第一波で感染を免れ、免疫を持つ人が少ない地方に緩やかに広がっていったものと思われる。また、後述するが、二波のピークとなる大正一〇年一月頃より、当局の感染対策を伝える記事が目立ってくる。ワクチンによる予防接種の実施、マスク着用の励行などがその中心であり、第一波の経験に基づき、流行感冒の症状や感染状況等が明らかになるとともに、徐々に対処法が徹底されてきたものと思われる。

○第三波の状況

内務省の統計では、大正九年一〇月から患者が発生し、翌一〇年二月に小さな波はあるものの、大きなピークを迎えることなく七月までの患者の発生が報告されている。新聞記事では、大正九年十二月二二日付けで、「流感季節 内務省で豫防宣伝」との見出しで内務省による感染予防の啓発等を実施することを伝える。その後一月二二日付けで小倉師団での流行、二六日付けで佐賀県下の流行を伝えるも、ついに県内での感染流行を報じる記事は見られなかった。

第二節 熊本県当局の対応策

内務省の報告書では、スペイン風邪流行に対しての熊本県庁並びに県関係団体の感染防止への対応策を次のように総括している¹¹⁾。

- ① 予防に関する思想の啓発
「本病の性質及予防心得を記載せる印刷物を一般に配布して注意を喚起し一方小学校に於て『マスク』の製法、含嗽の方法等を生徒に教へ生徒を通して家庭に予防法を宣伝せるものあり」
- ② 「マスク」及び含嗽の奨励
「県所属職員は全部『マスク』の使用を実行し又含嗽薬の共同購入等の方法に付て一般に指示したり 熊本市内の理髪營業者に対して『マスク』の使用及び含嗽の実行を命じ貸座敷營業者に対しては娼妓其他家族雇人に対し楼主の負担を以て『マスク』及含嗽薬を給与せしめたり 其の他学校児童一般に於ても之が使用をなせる者尠からず」
- ③ 予防接種の奨励
「一般に予防接種の徹底を計るべく熊本県衛生会に於て多数の『ワクチン』を準備し各方面へ配布の便を与へたり 尚予防接種希望者多数ある部落に対しては衛生会と、県衛生課と協力し警察医を派し無料にて或は薬品の実費を徴し接種を行ひたり 又町村に於ては貧困者に対し町村医をして無料接種を施行せしめたるあり」
- ④ 学校工場其の他多衆集合に対する施設
学校 「多数患者発生のため臨時閉鎖せるもの尠からず」
工場 「工場に於ても一時的閉鎖せるものあり」
- ⑤ 救療の状況
「流行著しき地方に対しては常置看護婦を派し重症患者の巡回看護に従事せしめたり」
- ⑥ 各種公益団体の活動の状況
「公益団体の活動として熊本県済生会の『マスク』百七十人分『カメレオン』含嗽薬四百八十磅を県下に無料配布し、熊本県衛生会に於ては流行性感冒『ワクチン』予防液七千六百五十人分を県下一般に無料配布し

警察部衛生課と協力無料接種を行ひたる等主なるものなり」

以上の感染対策の内容を少し詳しくみてみたい。まず熊本県当局は、感染防止の対策のため、大正七年一〇月三〇日付で県民に対する告諭並びに、郡市役所、警察署、町村役場等の管下の機関に訓令を發した。

本春内地ニ流行セル特種ノ感冒ハ夏期ニ至リテ病勢衰ヘタリシモ更ニ初秋の候ニ入りテ復諸府縣ニ散發スルニ及ヒ其病勢ノ熾烈ナル地方ニ在リテハ竟ニ諸學校ノ授業ヲモ中止セル向アリ一面海外ヨリノ情報ニ依レハ南亞聯邦北米其他ノ地方ニ於テ「スパニッシュ、インフルエンツア」と稱スル悪性感冒ノ為メニ慘禍ヲ蒙リツゝアル趣ナリ此等特種ノ感冒ガ世界的ニ流行シツゝアルハ争フヘカラサル事實ニシテ國民ノ保健上寔ニ憂慮ニ堪ヘサル所ナリ此秋ニ當リ縣民一致相警メ極力豫防撲滅ノ途ヲ講スルニアラサレハ其慘害測ルベカラザルモノアラン縣民克ク此意ヲ體シ左ノ豫防心得ニ依リ萬遺策ナキヲ期スヘシ
大正七年十月卅日
熊本縣知事

流行性感冒（インフルエンツア）豫防心得

一、本病ノ原因は一千八百八十二年プアイフェール氏の見出せるインフルエンツア菌と稱する微菌中にも至つて小さき細菌によつて起るものであるが時としては他の似よつた病原から起ることもあり
ます

二、本病の傳染は至つて迅速つて暫くの間に擴がりゆくものであります本病にかゝると老人、小兒、虚弱者は餘程危嶮であります殊に今度流行つて居る種類は性悪しくて死ぬ割合が多いから用心せねば
なりませぬ

三、本病の傳染る経路は病人の喀痰、唾液、鼻汁、又は咳嗽噴嚏の場合

霧のように飛散る泡沫によりて空氣中に飛び散る病毒を直接に鼻腔、口より吸込むによつて傳染るものであります又以上の病原に汚されたる食器、手拭、夜具などより傳染することもあります

四、本病の容体は始め多く悪寒、戰慄を以て起り熱は三十九度から四十度に昇り倦怠、頭痛、腰痛、四肢痛、疲労を覺へ食進まず咳嗽甚く喀痰あり又時として下痢を訴へ肺、心臓の病あるものは危嶮なり本病は大抵一、二週間にして治癒るも時として容体重く肺炎、中耳炎を起し不幸の轉歸を見ることがあり又本病は輕きものにてても養生を十分にせざれば肺結核等の下地を作ることあり又本病は全快しても暫くは病毒を保有して居る故に他人に傳染せしむることあり

五、本病の豫防法は

(イ) 第一病人に近づかぬを良しとす本病の流行期には芝居、活動寫眞、祭禮等多人數の集まる所には成るべく行かぬように心懸けなさい多數の集まる所には輕い病人や健康者にして病毒を有て居るもの（保菌者）が居るから用心なさい

(ロ) 流行時には室内の掃除を善くし晝は戸障子を開放いて空氣や日光の通入を良くし室内の乾燥くようにせねばなりませぬ又夜具脱衣等は毎日日光に曝すやうになさい夜分は戸障子を閉めて風を引かぬように注意なさい

(ハ) 病人が不幸にして出來たときは早く醫師に診せなさい病人は可成室内に健康な人を居らぬやうにし同衾などは決してしてはなりません病人の喀痰や唾液は石炭酸水にて消毒するか器物に入れて煮るやうにしなさい病人の食器類は釜に容れて一度沸騰すが良い病人の夜具は毎日日光に曝すやうになさい

(ニ) 本病に罹つたら輕くても十分醫療をなすは勿論他人に感染さぬように他人と談話の際は手巾、綿などで口、鼻を被ふように心懸く

るは大事な公德心であります

(二) 本病の流行時は夜行、夜深しは慎まねばなりませぬ又食後は五十倍鹽酸加里水で含嗽をなすも一の豫防法であります

(大正七年熊本県告諭第一號)

客歳猛威ヲ逞フシタル悪性感冒ハ十二月中旬ニ至リ殆ド終熄ヲ告ケタリシカ他府縣ニ在テハ昨今流行再燃セル地方アリ而シテ其ノ症状ハ更ニ悪性ヲ加ヘ死亡率亦増加セリト今ニ於テ充分ノ豫防警戒ヲ加フルニアラサレハ再ヒ惨害ヲ反復スル虞ナシトセス就テハ此際左記事項ノ勵行ニ務ムルト共ニ客年十月告諭第一號ノ主趣ヲ徹底セシメ弘ク一般部民ノ自覺ヲ促ス等更ニ一段ノ力ヲ竭スヘシ

大正八年二月十四日

熊本縣知事太田政弘

記

一、流行地ニ於テハ可成民衆ノ集合ヲ避ケシムルコト

二、一般ニ呼吸保護器ノ使用ヲ奨励シ殊ニ患家其他感染ノ虞アル場所ニ於テハ必ス之ヲ使用セシムルコト

三、一般ニ含嗽ヲ奨励スルコト

四、頭痛發熱等身体ニ異常アルトキハ必ス速カニ醫師ノ診断ヲ受ケ静養セシムルコト

五、患者ハ可成隔離シ全治ニ至ル迄ハ外出ヲ遠慮セシムルコト

(大正八年熊本縣訓令第五號)

ここには、密を避けること、マスク(呼吸保護器)の着用、うがい、の奨励、医師の診断と静養、患者の隔離など、現代にも通じる基本的な対処方針が示されており、関係機関ではその趣旨に沿って対策を進めている。

このうち、手早い感染防止対策として特に重視されているのがマスク着用

である。当時の社会一般では予防のための着用の習慣がなかったため、まずは諸官吏が率先して着用、さらに人が集まる興行場でのマスク着用の義務付けを行うなど、一般市民の着用も強力に推し進めている。

熊本警察署では流感蔓延の當節柄多人数の集合すべき劇場、活動寫眞館などが殊に病菌媒介の危険箇所なりとし病菌の媒介を防止すべき一策として此等興行場に入場する觀客に對シマスクの使用を勵行せしむべく來る二十日より當分の間市内各劇場活動寫眞館に入場すべき觀客にして若マスクを使用し居らざる者は絶対に(入)場を謝絶せしむる方針(中略)近頃一般にマスクの需要激増したる上興行場入場客が悉くマスクを使用する事とならば到底市内の藥種商店の在品のみにては多大の需要を充たす能はざるべきを感じ且つ應急策として森署長は署員の家族をして一兩日來既にマスクの製造に従事せしめつゝありて二十日より其製品を興行場の木戸口にて入場者にそれ／＼實費(多分五六錢ならん)頒布をなすことゝしたり」

(大正九年一月二〇日付『九州日日新聞』)

これと前後して、「流行感冒の襲來に通信事務に差支ぬよう熊本通信局で豫防策 先づ鉄道郵便從員にマスクを使用させる 今の處では大した事なし」(二七日付)と、一定の予防効果が認識されたこともあり、「專賣支局の流感豫防 マスクは永久使用」(二九日付)などと、職場や学校におけるマスクの着用は少しずつ普及していった。

他方、現代でも予防の切り札と期待されるワクチンの接種はどうだったのか。実は「ワクチン」とされる藥劑の提供そのものはかなり早い時期から始まっていた。第一波のピークであった大正七年十一月三〇日付の紙面では、すでに国内製藥会社から「流行性感冒の豫防注射に就て 臨床醫家諸君に急

告 此際速に臨床醫家の實驗に供せられむ事を望む」として、「感冒用混合ワクシン」「肺炎球菌ワクシン」「インフルエンザ菌ワクシン」の三種を医師に供給する用意があることが告知されている。

第二波のピークである大正九年一月一二日付では「二日間に四百五十名熊本の流感猖獗 上益城にも流行出した 豫防注射液を注文する」と見出しにあり、「目下東京傳染病院研究所に注射液の註文中なるが不日到着の上は先づ縣廳より豫防注射の施行を始むべし」とし、最新の感染状況とともに県庁衛生課の手配で豫防注射液の用意が進んでいること、県職員を手始めに接種を行う予定であることを報じている。同二六日付では、流感豫防注射 市内各所にて」とし、寺院などを会場とする一般向けの接種の様子を伝える。

熊本市にては既報の如く廿四日より二月四日まで豫定を以て流行感冒豫防注射を開始し廿四日は坪井浄行寺、廿五日は鹽屋町正念寺にて注射を行ひたるが浄行寺にては五十三名に上れりと今廿六日は南新坪井町専覚寺にて注射を行ふ筈にて希望者は成るべく午前中に集まられたしと料金は二回にて十銭なり(大正九年一月二六日付『九州日日新聞』)

ただし、同一八日付では、「熊本縣の流感豫防 注射液が足らず東京に注文」、また、同日付で「注射液の註文者殺到して製造が間に合はぬ 全國の醫師や藥種問屋から 千人分頼んで漸く五十人分ぐらいしか手に入らない」と、供給が必要に迫り付いていない様子もうかがえる。先述のように、現代から見ればその効果がほとんど期待できない「ワクチン」であったが、主として第二波以降、人々の期待をもとに接種が進められ、内務省の報告書によれば、熊本県内での接種者の合計は五万三三六一人にのぼるなど、福岡県の三万七五七二人と比較しても決して少ない数ではなかった。

第三節 スペイン風邪の与えた影響

スペイン風邪の蔓延は、第一波の襲来と共に、当時の熊本の社会にも様々な影響を与えた。もとより学校の閉鎖は広範に行われたが、他にも工場の閉鎖、郵便物の停滞、新聞紙面の縮小や遅配など、社会の基礎的なインフラが打撃を受けたことを当時の紙面から読み取ることができる。

悪性感冒は益々猖獗を極めて一家族枕を並べて打臥し居れる悲惨な家庭も少なからずために各種機関は多大の支障を蒙り殆ど其任務を完全に遂行しつゝある所なき状態となりたるが熊本縣廳も殆ど半数の缺勤者を見るに至り(略) (大正七年一月六日付『九州日日新聞』)

郵便事務の蒙る感冒の大打撃は全國で九州が第一と目されつゝあるが就中熊本の両郵便局は其最なるもので發送配達共に郵便物は山積して居るが従業員補充の道無く通信事務は將に杜絶せん計りの危機に瀕し昨日の如き熊本局に就て見るに發送事務は山田郵便課長自ら擲懸けで半病人而も半数に足らぬ従業員を督励しつゝ自身發送の區分を為しつゝある有様で配達夫に至つては同局四十八名中出勤者は僅に十四名であること既に二日を續けて居る電報の如きは通信手全滅の姿にて全部を合して僅々六名一人で數臺に當らざる可からざるより昨日來電報は一切受附ず總て郵便として發送している有様(略)

(大正七年一月五日付『九州日日新聞』)

流行感冒の影響は各方面とも甚大の打撃を受け居るが県立熊本圖書館にては職員其他出納手の如きも僅かに二人にて始末を附け居り午後開館の児童閱覽室監督に於ても平常の如く出納手より兼務せしむる事能はずして少き職員側より應急の間に合はせ居れり若今日以上に患者を出ださば到底閉館の已むなきに至るべしといふ又閱覽者側に於ても近

日其敷を減じ居る傾あり夜間閲覧の如きも百人を下らざるを常とせるに反し最近二、三、四の三日間は七十三、九十二、一〇三人の事實を示せるが如し

(大正七年十一月七日付『九州日日新聞』)

(社告) 猛威を揮へる悪性感冒は遂に本社工場を襲ひ大多數の罹病休業者を出して紙面の完全を期する能はず自然不體裁なる狭小の紙面を作製するに至りしは讀者に對し相濟まざる次第なるも事態止むを得ざるものあり恢復緒に就く迄謹んで寛恕を乞ふ 九州日日新聞社

(大正七年十一月二日付『九州日日新聞』)

收穫に困る農家 農家にては恰も米收穫期に入りてより感冒猖獗を極め家族はボロボロ倒れて見事に黄熟せる稻田を眺めつゝも刈入れるに人手なく偶鎌を入れたるも田に刈り倒したる儘空しく雨に濡らすの外なき状態にて大豊作を見込まれたる本年の稲も收穫には大なる影響を及ぼさざるべしと雖も品質を悪變せしむるは免れずと一般に憂慮され居れり

(大正七年十一月三日付『九州日日新聞』)

新聞には他県の事例として感染症の蔓延に伴い旅館・料理屋・風呂屋などが不景気である旨の記事も見られるが、他方、特需により多忙を極めた業種について「医師も薬店も氷屋も流行感冒で大繁盛」との見出しの記事が掲載されている。」

醫師 廻り切ぬ多忙 何と云つても此風は命取りと噂された丈に醫師の多忙は驚く可きもので平生餘り流行らなかつた人でさへ朝早くから車を飛ばして廻り扱さず心身綿の如くなつて歸つて來ると云ふ大多忙況して流行児となると物凄い程で、病症が單純な丈に薬を束にし

て作つて置くと云ふ勢ひ

薬剤 解熱剤は上た 某薬店主は語る「お醫者さまへ特別に納入品が多くなつたと云ふことは今の處別にありませんが、今度の風に就いては療法とか手當とかを各新聞に發表せられた結果素人方で間違ひ無く私共の店から薬を買つて行かれる方が多くアスピリンとかアンチピリン散とか云ふ解熱剤は寧ろ素人の宅に澤山出ました。咳嗽剤などは賣薬の方にもありますから是等が大分出た譯です。風と薬價の影響はアスピリンなどの解熱剤でコゝ十日計りにポンドに付き一圓位上げて來ました」

氷 二倍以上出る 罹病者が高熱の結果、殊に肺炎の気味のある者などには無くてはならぬ氷の賣方は素破らしいもので熊本製氷會社に就て聞くと「本社では二三日前まで製氷を續けてゐましたが燃料を使用していたのを動力に變へる工事のため目下休業中で來月初めの頃には又仕事に懸る事となつてゐます。賣高は風の流行る前まで一日五噸位であつたのが急に十噸以上になつてゐます(略)」

(大正七年一〇月三十一日付『九州日日新聞』)

「繁盛」という文字が見出しに踊るが、患者の治療にあたる医師の実情は次々に罹患する患者の対応に追われ、多忙を通り越し極めて深刻な状況だった。当時の診療は医師による往診が多かつたが、自ら罹患した開業医も多く、患者が必要とする医療が提供できないのが実情だった。

世界風といわるゝ今度の悪性流行感冒は到るところ猖獗を極めて殆ど底止するところを知らぬ有様であるが熊本市に於ける二三の醫師に就いて昨今の状態を聞いて見ると患者は數に於て幾なし分か減じて來たやうに思はるゝけれど重患者に却つて日に多くなる方で危険の度は一

層加はった感があるその上市内に於ては一人で三百人乃至四百の患者を受持つて居る醫師も少なくなく往診時間は甚だしい日は午前一時に及ぶこともあり往診の車上で辨當を食ふたという話もある位であるが斯の極度の活動は醫師の間に漸く犠牲者を生じ來たり病辱に就いたものも二三にして止まらず一醫師の如きは昨今危篤を傳へられて居る事態斯うなつて來ると醫師の方でも止むを得ず患者の全部に十分の注意を配ることが不可能となつて來るので責任を重んずる醫師は平素かゝりつけの患者を主としてそれに自己の力の限度内患者數を預想してそれ以上は断然拒絶するといふ有様でその結果發病後三日も四日も遂に診察を受け得ずして呻吟するものもあるといふ始末で病菌力は今後益々強くなり氣候は寒冷に向かう時には實際劍呑千萬であるが斯かる時こそ赤十字救護班の活動を要するべきでは無いかといふ聲が識者の間に唱へられて居るがその方法としては各所に救護班の出張所を設け開業醫師の力の及ばざる患者に對する手當を為し或は開業醫師と協力して活動を望むといふのである

(大正七年十一月二三日付『九州日日新聞』)

「各府縣とも醫師不足 來春までは到底終熄の見込みなきにより当局にては極力之が餘防策を考究中なるが府縣にては醫師に不足を來せる所少からず」(十一月五日)、まさに「医療崩壊」を來していたのが実情だった。『熊本市医師会史』には、スペイン風邪に罹患し一二名の医師が犠牲になったことが記されている¹²⁾。

結びとして

冒頭にも記したように、熊本の歴史を概説した文献にスペイン風邪に関する記事を見ることは極めて少ない。まさに埋もれた歴史と言うべきかもしれない。

ない。当時の新聞をみても、流行のピークには多くの記事が掲載されているが、第三波になると殆ど関係記事を見ることができなくなる。スペイン風邪の蔓延をよそに、天然痘やチフス、コレラなどは毎年のように発生しており、感染症の蔓延は先人にとつて日常茶飯事であつたとも言える。七千人に及ぶ犠牲者を出しながら歴史の片隅に「埋もれた」のも、そうした理由があつたのかもしれない。当時の熊本県で発行されていた医家向けの印刷物である『衛生時報』の大正九年三月二〇日号のコラムは「流感が下火になつたからでもあらうが一時盛んに使用されたマスク昨今はだんだん掛ける人が少なくなつて満員の電車でせいで五人か六人は心細い、殊に學校生徒などは、著しく使用者が少なくなつた」と嘆いている。第一波の発生からわずか二年後のこの証言は、教訓を引き継ぐことの難しさを如実に表している。

他方、強い印象を受けた記事がある。第一波がピークを迎えていた大正七年十一月三日付け九州日日新聞紙面では、多くの工場が感染の影響を受ける中で、「大江の熊本製糸会社は天長節当日休日にも拘らず工女全部の外出を禁じて社内で慰安の方法を取つた為一人の病人も無いと大自慢。(中略)」工場方面では寄宿制度の処は外界との接触が無い為比較的好成績で外来者の多い工場ほど痛みが多い割合を示して居る」などと報じている。感染経路の遮断という知恵が発揮された事例である。現在でも通用する感染防止策であり、こうした体験の積み重ねこそが、現在の感染防止対策の基本を作り上げてきたのだと思う。

本稿を草している段階でも新型コロナウイルスのニュースが日々伝えられている。もとより、スペイン風邪と現代の感染症は、ウイルスの種類も症状も、さらには医療水準も異なるのは当然である。しかし、当時の状況を見ると、そこから汲むべき教訓は決して少なくない。いずれの感染症も人が人へと感染させるものである以上、百年前も同様であつたマスク着用の励行、社会的な距離をとることなど、これまでの蓄積に基づく感染対策の基本を地

九州日日新聞 ス페인風邪関連記事(抄)		
日付	見出し	記事概要
T7.10.21	流行性感冒の病原菌は既に発見せられて居る 佛國人の新発見といふは別種の病原菌か或は培養法の発見ならん	流行性感冒の病原菌がフランス人により発見されたというニュースの続報
T7.10.22	馬來半島に惡疫流行	発疹性感冒が流行中とのシンガポールからの情報
T7.10.24	流行性感冒學校を襲ふ、児童百八十名	鹿児島県師範学校附属小学校高等科児童の罹患状況
T7.10.25	各地を襲ふ流行感冒 小学校休校 大分市も	大分市、福岡県大牟田市の小学校児童の罹患状況
T7.10.26	流行性感冒各地を襲ふ、熊本附近にも患者夥し	熊本市付近の状況のうち、済々黉の生徒の罹患状況、症状の特徴など
T7.10.27	悪性感冒、益々猖獗 死亡者多し	感冒蔓延に伴う学校、郵便、鉄道事業など全国における影響
T7.10.27	流行感冒益々猖獗 全縣下の學校襲はる 済々黉は昨日までに患者二百五十餘名 屏息するまで臨時休校	県下各地の学校の罹患状況
T7.10.28	罹病六百名 大牟田の學童	大牟田市の学校の罹患状況
T7.10.28	郵便事務が執れぬ 熊本に応援請求	大牟田局の状況、佐賀各地の状況など
T7.10.28	流行感冒と通牒	文部省から各府県知事、直轄学校への感冒に関する通知
T7.10.29	運動會を止めよ、流行性感冒の豫防策	予防策として運動會中止の意見
T7.10.28	流行性感冒豫防注意	熊本県から各学校に流行性感冒蔓延に関する注意書の発出
T7.10.29	流行感冒衰へず 郡部の11學校にも患者續出 熊本中学も遂に休業	県下各地の学校の罹患状況 郵便局や熊本専売局の職員の罹患状況など
T7.10.30	派遣軍の感冒	沿海州同北滿方面の派遣軍の罹患など
T7.10.30	京都市の流行感冒 猖獗を極む	京都市内の学校の罹患状況
T7.10.30	大流行の悪性感冒 各學校の患者益々増加 熊本高小は三百三十六名女學校も幼稚園も休業	熊本市内及び周辺の学校の罹患状況 市内学校の発病者数一覧 大田知事・春藤内務部長の罹患など
T7.10.30	郵便物の大停滯 長崎では欧文電報の翻譯が出来ない 感冒に襲はれた郵便局 坪井局では市外の配達は一泊置き	熊本坪井局、長崎局、大牟田局の職員の罹患と影響など
T7.10.31	流行感冒	長崎の学校の罹患状況
T7.10.31	流行感冒益々猖獗を極む 休校續出す	熊本市内及び県立学校等の罹患や休校の状況など
T7.10.31	感冒豫防告諭	10月30日付け熊本県公報号外での告諭
T7.10.31	流行風邪の鼻血の手當 鼻に詰をするのは危険である	感冒罹患に伴う鼻血の手当法など
T7.10.31	醫師も藥店も氷屋も流行感冒で大繁昌 流行ッ児の醫者は藥を束にして置く 蕎麦うどんやも繁昌する	感冒蔓延に伴う商売等への影響
T7.10.31	猛威を揮ふ感冒 熊本市中の小學校は大抵休校 都城聯隊患者續出 惨たる大牟田市 死亡者續出 火葬の競争	熊本市内の学校の休校、近隣諸県の状況など
T7.11.2	謹告 九州日日新聞社 筑後新聞社	職員の罹患に伴う紙面縮小のお詫びの社告
T7.11.3	謹告 九州日日新聞社 筑後新聞社	職員の罹患に伴う紙面縮小のお詫びの社告
T7.11.3	アスピリンの需要	感冒蔓延に伴うアスピリン騰貴など
T7.11.3	尚衰へぬ流行感冒 學校續々休校 流行性感冒と工場	県下各地の学校の罹患及び休校状況 専売局や製糸工場における罹患など
T7.11.3	感冒容易に衰へず 學校工場休業續出 僧侶不足 レコード破りの死亡率大牟田の感冒各校休業繼續	県立熊本図書館の状況、久留米や大牟田の状況等
T7.11.3	外米が賣れぬ 感冒流行の為	熊本市営外米の売れ行き減少など
T7.11.4	感冒尚猖獗 五高も休校 大牟田では死者續出 火葬場では屍體の處置に困る	第五高等学校等の休校状況 大牟田市での影響など
T7.11.4	全滅せる本社植字部 空前の變災を告白す	九州日日新聞社における職員の罹患状況と縮小紙面での発行に至る経緯の報告と謝罪
T7.11.5	通信事務殆ど杜絶 郵便課長自身で区分 電報は郵便で發送す	郵便局における蔓延に伴う影響など
T7.11.5	流行性感冒勢ひ猖獗 學校は殆ど全部休校す	県立学校の罹患及び休校の状況など
T7.11.5	各府縣とも醫師不足 當局の善後策	政府での医師不足対策協議中との情報など
T7.11.6	謹告 九州日日新聞社 筑後新聞社	職員の罹患に伴う紙面縮小のお詫びの社告
T7.11.6	感冒尚猖獗 各方面の支障	飽託、玉名、鹿本、芦北、天草、八代など県内各郡別の罹患及び休校状況など
T7.11.8	流行感冒益々蔓延の兆あり 廻診新記録三百廿軒と云ふ猛者が出了 慘話悲話枕を並べた妻は絶命 俘虜襲はる工場勤務者も襲はる 一村に患者千名 郵便局の恢復未だし 大牟田市益々猖獗	患者増加に伴う医師の診療状況、坪井郵便局、益城郡木山周辺、大牟田市周辺の状況など
T7.11.8	流行感冒 熊本益々猖獗 済々黉引續休業 二師旅行團 天草方面漁業の打撃死亡者多し 旅館料理屋不景氣不景氣は湯屋迄	済々黉ほか学校の休業の状況、天草の漁船における罹患、市中の景氣への影響など
T7.11.10	流行感冒両師範の休業 八代中學延期 休校 續々延期 大分益々蔓延 郵便配達不能 久留米地方二萬人以上死亡率増加 鹿児島市八千人	学校の休業状況、隣県の状況など
T7.11.11	流行感冒 女師更に休業 九州學院開校 大村聯隊感冒に襲はる 演習地より續々歸還す 三池坑では三分の一の欠勤出炭高減る 大牟田では死者多し	女子師範学校の休業状況、軍隊や三池炭鉱等での状況など
T7.11.11	肥前大村では在郷軍人が無報酬で郵便物配達	長崎県大村郵便局の状況
T7.11.11	新聞配達の困難 配達人殆ど全部感冒に罹る 讀者諸君に對して何とも申譯なし他の職業と違つて補充が出来ず	九州日日新聞社の新聞配達人の多くが罹患し、配達困難であることに理解を求める記事
T7.11.12	流行感冒 熊本市内の死者殖ゆ 十日の届出約二十名 開校した學校と開校せぬ學校 小學校始業 飽託引續休校 松橋方面猖獗 軍隊監獄も襲はる久留米地方 青年會員が郵便配達 解熱剤の暴騰	小學校等の休業状況、隣県の状況、解熱剤アスピリンの需要増に伴う高騰など
T7.11.12	感冒菌の論戰 片や帝大、片や北里 後になる程死亡者の殖える譯	流行性感冒の病原菌の研究状況など
T7.11.13	斯かる時こそ赤十字社救護班の活動すべき時 感冒猖獗と一部の人の意見 醫師中にもボツツと犠牲者が出る	開業医の業務の危機的状況と赤十字社救護班による活動への期待など
T7.11.13	流行感冒 熊本の郡部漸く猖獗 收穫に困る農家	球磨、芦北、阿蘇、八代、上下益城、菊池、鹿本、玉名、宇土、天草など、熊本市内に遅れて蔓延する郡部の状況、稲の收穫に困る農家の状況など

T7.11.13	風邪と通信事業	九州通信局管内の状況調査など
T7.11.14	流行感冒 郡部校休校頻々	菊池、宇土、鹿本、玉名、球磨、芦北など各郡の小学校の罹患状況 市内小学校の欠席数など
T7.11.15	流行感冒 郡部は今が峠 感冒と市中の死亡者 鮎託は休校四十七・七、生徒日中は大抵開校	八代、鹿本、阿蘇、芦北など各郡の小学校の罹患状況 熊本市内の感冒による死者数など
T7.11.15	電信は未だ復舊せず 至急報官報以外は相變らず郵送 九州管内では宮崎局が一等困難	九州通信局管内の通信事務の状況
T7.11.16	孟買市感冒猖獗 死者一日七百名に上りし日あり十一月に入りて漸く下火 米國政府の入國拒絶 横濱で健康診断を行ふ	インドのポンペー市の罹患状況、罹患患者入国禁止の米國政府の措置を受け、横浜にての健康診断の措置など
T7.11.17	感冒患者漸く減る 郡部では尚休校續出	球磨・玉名・阿蘇各郡の小学校の罹患状況など
T7.11.17	佐賀の感冒死亡者多し	佐賀県下の罹患状況
T7.11.17	感冒の悲劇 三猪は下火	隣県の状況など
T7.11.19	流行感冒 五郡休校数	天草、芦北、玉名、鹿本、阿蘇各郡の小学校の罹患患者や休校の状況など
T7.11.19	最近の死亡率は約五倍 保険と感冒	流行感冒にともなう帝國生命熊本出張所管内における被保険者死亡率の上昇など
T7.11.20	看護婦の大拂底 註文に應じ切れぬ 需要が昨年の三倍以上	福岡県久留米市における看護婦の需要の逼迫状況など
T7.11.20	流行感冒 休校尚多し	球磨郡内小学校における罹患、休校の状況
T7.11.21	流行感冒 休校延期の學校	宇土、菊池、葦北、鹿本、玉名郡内小学校の罹患、休校の状況
T7.11.21	九州線の感冒患者	九州鉄道熊本運輸事務所管内における従業員等の罹患等状況
T7.11.22	流行感冒 休校延期の學校	宇土、菊池、葦北、鹿本、玉名郡内小学校の罹患、休校の状況
T7.11.22	遅るゝ程病毒は強烈 感染力は弱くなる 谷口博士の流行感冒談(上)	県立熊本病院谷口院長の流行性感冒についての講演概要(上)
T7.11.22	市の悪性感冒終熄近し	熊本市内の感冒の終息に向かう見通し
T7.11.23	感冒は郡部も終熄近し 學校の状況 球磨の感冒尚猖獗を極む	天草、玉名、八代郡内の小学校の罹患、休校の状況。球磨郡の感冒の状況
T7.11.23	遅るゝ程病毒は強烈 感染力は弱くなる 谷口博士の流行感冒談(中)	県立熊本病院谷口院長の流行性感冒についての講演概要(中)
T7.11.24	感冒は郡部も終熄近し 學校の状況	天草、玉名、八代郡内の小学校の罹患、休校の状況
T7.11.24	遅るゝ程病毒は強烈 感染力は弱くなる 谷口博士の流行感冒談(下)	県立熊本病院谷口院長の流行性感冒についての講演概要(下)
T7.11.27	感冒で死んだ者は熊本縣下で約二千人 本月中旬の統計	11月15日現在の県衛生課発表の県下の罹患患者、死亡者数の統計。患者数440799名、死亡者数1926名。鮎託、天草、熊本の順に蔓延
T7.11.27	運動界 八代運動會中止	八代郡教育会主催の運動會が感冒を理由に中止
T7.11.30	(広告)流行性感冒の豫防注射に就て臨床醫家諸君に急告	星製薬株式会社からワクチンの臨床試験参加についての医師向けの告知
T7.12.4	熊本縣の感冒 其の患者數	11月20日現在での県下の罹病者、死亡者の統計。患者数558700名、死亡者数3036名
T7.12.8	荒し廻った感冒の跡 小中學の患者十萬千七十餘人 死者を出さなかつたのは僅に三郡のみ	県学務課による11月20日時点での県内学校における罹患患者、死亡者数の統計
T7.12.11	流行感冒原因 石原講師講演	東京医科大学講師らによる県内の状況調査と公会堂における公演など
T7.12.11	此冬は古着までも賣渡なのが賣れる	感冒の影響で古着の流通が増加したことなど
T7.12.24	感冒死者約四千四百人	県内の罹患患者累計647,488名、死者数4,395名など。天草郡は死者多く797名となる
T8.1.18	桑港の感冒	サンフランシスコにおける流行状況など
T8.1.23	流行感冒の歴史と奥様方の注意すべき事	医学博士富士川游氏による流行性感冒の歴史に関する談話
T8.1.26	盛返した流行感冒	東京、大阪、京都等での感冒の再流行と注意点など
T8.1.26	工手大不足 熊本專賣支局	前年未来の感冒の影響による女工手の不足など
T8.2.8	感冒の豫防策	インフルエンザ予防策としてのカルシウムの摂取など
T8.2.9	保險會社は大損	感冒による死者増加に伴う保険金支払額の増加など
T8.2.16	流行感冒の警戒 全縣下にお布札を出す	感冒の再流行に備へ、県が郡市役所、警察署、町村役場等へ2月14日に警戒を強化する訓令を发出したこと
T8.11.6	世界風邪再び日本を襲はんとす	再流行に備へての健康法、家庭での常備薬など
T8.11.27	恐ろしい流行感冒襲來の兆あり	感冒の特効薬の頒布広告
T8.12.16	流行感冒は米國では陽萎扶斯と同様に取扱つてゐる	内務省による流行感冒の全国の状況と見込みなど
T8.12.16	流行感冒小學校を襲ふ 福岡縣下	福岡市郊外における学校の罹患状況など
T8.12.17	吳の悪性感冒猛烈を極む	吳海軍工廠における罹患状況
T8.12.20	京城の感冒猖獗 死亡毎日百名	朝鮮京城における罹患状況など
T8.12.25	朝鮮の感冒益猖獗 京城のみで死亡千五百名	朝鮮京城における罹患状況など
T9.1.3	六師管下に流感襲來 都城聯隊最も猖獗	熊本兵団での罹患状況や、県下各地での流行など。水俣、宇土に関する情報
T9.1.9	流行感冒の爲め遣外艦出發延期	台湾基隆に寄港した海軍艦で罹患患者が出たことなど
T9.1.9	流行感冒蔓延す 熊本縣下では市内よりも郡部に流行す	前年11月初旬以来の県下での流行の状況、また郡部での蔓延状況など
T9.1.11	各地に感冒猖獗 多くは肺炎を併發する	福岡県下の状況、熊本市内でも平均2名の死者があることなど、熊本県下での状況とその症状
T9.1.12	二日間に四百五十名 熊本の流感猖獗 上益城にも流行出した 豫防注射液を注文する	熊本市内及び近接町村での患者の急増、県衛生課による豫防注射の準備など
T9.1.14	昨晩横濱入港の西伯利丸の乗客に八十名以上の感冒患者あり	客船での患者群の発生と病院への収容、健康者への豫防接種など
T9.1.14	熊本縣下流行感冒 小學児童にも患者續出	上益城郡御船警察署管内での罹患状況など
T9.1.15	全国の師團悉く流感に悩さる 熊本衛戍病院は満員 偕行社に収容の準備	軍隊での罹患状況、熊本衛戍病院では237人の入院患者があることなど
T9.1.15	罹患者の肺炎予防 六師団ではレミヂンを用ふ 将校家族に豫防接種	熊本師団での予防、治療法など
T9.1.16	慘憺たる大阪の流感	大阪での状況と幼稚園、小学校の閉鎖命令など
T9.1.16	流感通牒	1月15日付の内務省から地方長官あての予防通牒发出など
T9.1.16	福岡縣の流感巡回救護 全縣下に亘り益々猖獗	日本赤十字社福岡縣支部による巡回救護班の設置など
T9.1.16	久留米の流感 警官の豫防具	久留米警察署管内の罹患状況と警察官への呼吸器の配布など
T9.1.17	流行感冒豫防のマスク(写真)	熊本地方でも軍隊、学校など予防のためのマスク着用が増えたことなど
T9.1.17	流行感冒の襲來に通信事務に差支めよう熊本通信局で豫防策	事務停滯を防ぐため、局員や交換手などにマスクを配付し着用せしめたことなど
T9.1.17	流感と神秘的な一説	悪性感冒の原因は彗星が地球にまき散らす毒物であるとの説を紹介
T9.1.17	防疫官を全國に派す 口覆なきものは乗車嚴禁	内務省衛生局から地方の感染状況視察及び防疫の督励のための担当者派遣のこと、さらに、地方でも府県令によりマスク着用なきものを電車等に乗車を禁ずる旨を可能とする通知など

T9.1.18	門司小學全部休校 興行物にはマスクを嵌めた者だけは入場許可 福岡縣下の流感益々猖獗	福岡県における罹患状況と防止対策など。福岡縣廳では職員へのマスクの配布とうがいの奨励を実施
T9.1.18	熊本縣の流感豫防 注射液が足らず東京に注文 其後の流感蔓延地方	熊本縣廳で職員に対しマスク着用の励行、また、豫防接種を官員に対して実施。また玉名郡萬田炭坑の罹患状況など
T9.1.18	鹿児島郵便局の流感豫防	郵便事務の停滯予防のため局員へのマスク着用の奨励など
T9.1.19	専売支局の流感豫防 マスクは永久使用	専売支局での職員へのマスク着用、予防接種のことなど
T9.1.19	球磨の豫防	人吉警察署管内各戸への流感予防心得の配布など
T9.1.19	マスク使用励行	熊本警察署では市民にマスク使用を励行し、署員の家族に製造せしめたマスクを実費で頒布する計画など
T9.1.19	鹿児島縣の流感 七校休學す	鹿児島県下の学校の休校状況
T9.1.20	熊本市の流行感冒豫防 興行場にはマスクを着用せぬ人は入場を禁ず	熊本警察署の指示により、劇場、活動写真館などでマスク着用を義務付け、当該マスクは署員家族製造のものを頒布のことなど
T9.1.20	流感豫防注射液 ワクチンと血清液 素人でも之だけの區別は心得て置かねばならぬ	予防接種に関する注射液の基礎的な理解に関する啓発記事
T9.1.20	流行感冒に罹った時の注意 豫防法は深夜外出せぬこと	罹患に伴う肺炎の防止法など
T9.1.21	流行感冒益々蔓延す 福岡市外の各學校休む	福岡市内の学校の罹患状況など
T9.1.21	熊本警察署員の家族はマスク製造に大車輪 方々から是非に亙るの所望を受けて夜も十二時ころまで	警察署員家族製造のマスクに官公庁や専売支局等から注文が殺到、市民に頒布する分も不足する状態 1枚5銭での頒布では引き合わない旨
T9.1.21	悲惨な家庭 一家全滅	大牟田の一家での罹患など
T9.1.23	流行性感冒に御變症の第二皇子殿下御注意申上ぐべき御容態	淳宮殿下の感冒罹患とその症状など
T9.1.24	熊本縣下の流感患者七千人に上らん 郡部に尚蔓延の兆あり 市内には患者割合に少し	県内各地の罹患状況など
T9.1.24	福岡縣の患者二萬七千人 一日間千三百餘名發患	福岡縣衛生課の情報に基づく罹患状況など
T9.1.24	流行感冒と工場 励行セ七條	23日熊本警察署から管内の工場に対し感染予防の項目を示達したことなど
T9.1.24	第六師團在熊部隊の流感患者三百九十二名病院は満員	熊本衛戍病院での患者入院状況など
T9.1.25	鹿児島市では中學校も二十三日より全部休校	鹿児島市内で小学校に続き中学校でも休校措置がとられた件
T9.1.25	熊本縣下の流感患者	県内各地の罹患状況の統計資料
T9.1.26	(広告)感冒の快癒報告	上京中の財界人高橋長秋による流感の快癒報告
T9.1.26	危険な感冒の微菌が注射液になるまで 北里研究所の昨今 一日に五萬五千人分製造 他の研究も血清製造も其方除け	北里研究所の予防接種注射液の製造現場を訪問しての報告
T9.1.26	宇土大嶽地方流感猖獗 醫者の不足悲惨を極む	宇土大嶽村・戸馳村の罹患や診療の状況
T9.1.26	福岡縣の患者六萬を超ゆ 流感益々蔓延死亡三千近し	福岡県下における患者数、死亡者数など
T9.1.26	流感豫防注射市内各所にて	1月24日～2月4日まで熊本市内各所にて予防接種のこと
T9.1.26	福岡の流行感冒 市中ではマスクが六萬賣れた	福岡警察署管内の罹患及びマスクの奨励等の状況
T9.1.30	流感が生む悲惨事 奇特な看護婦も遂に斃る	熊本市内医院勤務の看護婦の罹患など
T9.1.30	球磨地方の流行感冒 極力警戒	球磨郡内の罹患状況、済生会からマスクの供与など
T9.1.31	妻に死別れて発狂す 流感の悲惨事	感冒の犠牲に伴う事件等
T9.1.31	鰻の脂肪が感冒に利く 但し科学的には立証されぬ	悪性感冒の特効薬としての鰻に関する民間療法の紹介
T9.2.1	市俄古の流感	米国ニューヨーク及びシカゴにおける罹患患者数、死亡者数など
T9.2.2	熊本縣下の流感患者と其死亡數	県内の患者数・死亡者数の統計
T9.2.4	感冒で死んだ人 熊本市では一月中に五十三人	第2波のピークである熊本市内の1月中の罹患患者、死亡者数など
T9.2.5	熊本縣下の流行衰ふ 休校も減る	第2波の1月以降休校した県下小学校など
T9.2.6	三人撲殺の悲惨事 兇行後狂人の状態となる原因は流行性感冒か	大阪府における殺人事件の犯行の原因が感冒とする記事
T9.2.6	本社に寄せたのぶ子の手紙 健気な妹の犠牲的精神を思ひて	1月30日付けの記事で取り上げられた感冒の犠牲になった看護婦の姉からの手紙
T9.10.12	今年入營の装丁には二回の豫防注射 海兵團入團者にも同様陸軍の流感豫防は絶対的	予防接種の実施など軍隊における感染予防策など
T9.12.8	流感豫防施設	内務省衛生局の感冒予防策、宣伝ビラの配布など
T9.12.12	流感季節 内務省で豫防宣傳	寒気襲来に伴う感冒流行に備えての啓発など
T9.12.16	流行感冒に関する五博士の意見書 病原體は依然不明	流行性感冒の原因や予防策に関する医学士会の意見書など
T10.1.21	全國師團の流感 小倉師團が一等多い 陸軍省発表	陸軍省発表の全國師團別の罹患患者統計
T10.1.25	軍馬の流行性感冒 小倉師團下に續發 暫次蔓延の兆あり	第12師團の軍馬隊の軍馬に感冒様の症状を呈するものがあること
T10.1.26	佐賀縣下の麻疹と流感 各學校襲はる	佐賀県下の師範学校等における罹患状況など
T10.2.5	悪性感冒流行 全世界を襲ふ憂ひあり 英國保健省發表	流行性感冒が再び流行する可能性があるとのイギリス保健省の発表など

第2表 『九州日日新聞』スペイン風邪関連記事

